いなとぼら

川口孫治郎

松柏科の大深林幾十里に亙る落葉の下雫が、集り集つて、古世紀層の溪谷を洗ひ來つて、旺洋と、して海に朝するその川口では、大砂小砂も大抵は蛇紋岩の大丸小丸であつて、岸邊に沿うた蘆荻沮洳たるその先きの、淺瀨に、怡々として自適せる魚鱗の數へ得らるゝまで澄み渡つて居る。此川筋が我輩の過去の腕白の舞臺の一つであつた。

後年、隅田、利根は勿論、信濃川口で數日復習をしたこともあつた。殊に筑後川口では四ヶ年ばかり小供の時の復習をやつてみたが。が此等の川々は皆中積層の間を流れ來る爲に趣が前のものと多少違ふところがある。そこで先づ前の澄んだ川の方から話をしやうと思ふ。

桃が咲き櫻が欠ぎ李が開き梨が綻びて來た春の末、何となくチラ〳〵と晴々しき平穩な潮が、あの沮洳たる蘆や荻の參差と茂ひ立つた水際までふし寄せて來る。そこに何をあさるにや小さな奴共約一個中隊ばかり一列になつて、各自頭を下に吻もて砂泥の上を忙はしげにつゝきつゝ尾を稍上に水面と四十五度位に保ちつゝ打揃つて行進して居る。熟視すれば、鮒兒にしては細く、鰷兒にしては太く、試に彼等に豆大の砂を一兩個見舞つて見ると、其一群が一列のまゝで左右前後都合のよかりさうな方向に、素早く進退する。それは鰡の子供即ち『イナ』といふものどもに相違ない。

彼等の進退する要領を能くのみ込んでゐて、編目の細かい叉手の可なり大きなのを、陸から長柄もて、巧みに突然に彼等の逃路を塞いでやると彼等は慌てゝ皆網の中に駈け込んで終う。

小供の時代に我輩は、父にねだつて到頭二人の漁夫を雇つて川狩をした序に、右の方略で、一網無慮三百許を掬ひ上げた。水箱の中で彼等が逃げ口を求めて非常に跳ね廻はる有樣、後年であつたならば之は人生でいへば、煩悶とでもいふべきものかと思つたかも知れぬが、當時は唯もう彼等の元氣に騷ぐ有樣が面白くて、殆んど夢中になつて喜んで見て居つた。愈歸宅することになつて船を

他の岸に着けた時に、他に五六の雜魚は水槽に入れて携へ歸る仕度をして呉れたが、例の鰡の子供等を逃がしてやりませうと漁夫から建議があつた。父も無論賛成せらるゝ面持であつた。之に聊か驚いて原案維持に中々努めて居ると、漁夫共は口を揃へて、鰡は幼時は潮水と淡水とのたゝかひに生長するもので、潮がさゝば川の中流までも上つて行くこともあるが、元來は海が本宅であるのだから稍成長すれば皆海に歸つて終うものである。されば全くの淡水では育つものでない。三百も持つて歸られてそれ等を皆死なして、ドウなさる。と我輩に忠告である。父からも、其方の家は淡水の流るゝところ、鰡の家は潮水の通ふところ、其方は之から家に歸るのだ、鰡兒も定めて其家に歸りたいであらう、と諭された。併し當時の我輩の胸中は、白髪の老爺になつた今日でも尚ほ明瞭に記憶に存して居る、實に簡單なものであつた。即ち自身で手を下して受けた網に之れ丈も捕れたのであるといふをを、家にある母に誇りたいと思ふ一念のみであつたので、遂に一夜丈我家に留めお

さ翌日は一切逃がしてやります、といふ條件付で、我輩の願意が父より聽屆けられ大得意で、漁夫に持たせて家路に就く、途中でも尚ほ時々蓋をとらせて彼等鰡兒供の動靜を見て樂んだほどで、家に歸つてからは其捕獲の功名談で一同を困却させたらしく後日の笑はれ草になつた位であつた。

扨、翌朝になつた。父が外出せらるゝに際して、今日はあの鰡の子供丈は逃がしてやらねばならぬぞ、と重ねての申渡をせられたし、母も、折角だつたけれど死なしては可哀想だからと言ひ聞かさるゝので、遂に致方なく逃がしてやることに決心した。自分で掬つたのだから逃がしてやるのも自分でやりたいといふ小供心、下男の助けを借るのが厭やで、弟と妹と吾輩とで三人揃つても一人の大男に足らない小供ながら、三方から棒を組んで、其中心に例の鰡の小供三百許と、總勢賑々しく大名の行列よろしくといふ態で、『鰡遁がし』に行くことになつた。

小供といふものは何處までも小供だ。遁がしに行くとて騒ぎながら、何處へ遁がすといふ明瞭な

觀念は我輩にすらなかつたのだから況して弟や妹にあらう筈がない。遂に誰が發議するとはなしに、提げて歩くのが重くて槽内の水が波立つて、搖れて〳〵苦いから、一番手近かにある、平たくて淺い大きな貯水池に遁がしてやらうじやないかと、ドウかの拍子で議忽ち三人の間に一決してしまつた。

愈、池の水際に水槽を下ろして、三人が交番に、帆立貝の杓子で、バチ〳〵跳ぬる鯰を掬ひ出して、盡く遁してやつた。始め之を放ちしに圉圉焉として居つたが、程なく悠然として行つてしまつた。之でやつと、身からも心からも重荷を下ろして終つて三人は樂しく歸つて來た。

右の趣、早速に兩親に報告し、『其處を得たるかな』と御褒美にでも預かるつもりのところ、豈圖らむや、父は突然可笑しさうに笑ひ出され、母は困つたやうな容子をせられて居る。弟妹は呆氣にとられて居る。そこで聰明睿智の我輩も辛うじて氣がついた。成程、淡水の池へ放したのが、聊か賢明に過ぎたといふことを悟つて、いたく赤面し且つ鯰君達に相濟まぬことをしたといふ後悔の念が壓しきれなかつた。その後、鯰などの話が出ると何時も其席を避けるくらゐにまで參つて居つたのである。實は腕白な割合に小心であつたと見えて、當分其池の近くへも行かないようにして居つた。強ち三百の亡靈に苦しめらるゝであらうと心配したわけでもなかつたらうが。

青葉の夏も過ぎて、右の失敗を人も忘れ、我も忘れた、袂涼しき秋風の吹く、所謂天高氣清の九月下旬の一日、容易に笑ひ給はぬ父は、再び笑まれつゝ、殊に此度はいとくつろがれつゝ、可笑しいこともあるものかなと、外から歸つて來られての御話。

聞けば、五月以來、灌漑に用ひた彼の貯水池の餘りの水も、親樋差替の爲に此際涸らすことになつて、明後日あたりは全く涸るゝであらうと期待せられた今日、何人も思ひ設けぬ素敵に大きな魚族が、一列になつて、縱横に進退する、併し鯉ではない況して鮒でもない、何んでも餘程活潑に跳ぬる魚で而かも其數が約三百許もあるとの事。父

の此話によつて母は我輩兄弟妹の面を見ながら、如何にもうれしげな容子をせられて居る。聰明睿智の我輩は又候、狐につまゝれたやうで、唯茫然として居つたが、頓かて父が『育まいと思つた鰡がドウも不思議にも申分なく成長したと見ゆる』といはれし時に、やつと氣がついて、ドウもかうも話に出來ぬはどうれしくて、本當ですか〳〵と繰返すと、父は僞はいはぬと笑つて居らるゝので一層不安に思つた位であつた。

一家で漁獲したとて面白くないから、といふことで、里の若者殘らずに通知をして、明日午後、有志の競漁大會とでもいふやうなことを擧行しやうと決定した。明後日では水量が甚だ減ずる故、多人數で樂んでやるには却ていかぬといふ心配から、割合に水の多い明日としたので、當日の面白可笑しき光景は、今尙はあり〳〵と眼前にちらついて居る。其百人許の屈强な若者達の競爭の委細などは茲に必要がないから略しておくが、唯一つ我輩に著しき印象を與へたことは、僅か一年で、尺にあまるはどにも大きくなつて居つたことであつた。即ち鰡は其成長の極めて速かなものであることを始めて知つたことであつた。

此競漁會の傍觀者も隨分澤山であつた。其中に、郷先生まで出席せられて居つたが、其頃……イヤ今日でもさうだが……先生といへば、何んでも知つて居る生きた神と信じて居つたから、早速、鰡に就いて御尋ねをしたところ、其先生、今から考へても流石に先生であつた。漢學の先生に似合はぬ粹人か但しはハイカラーか、近世の科學的智識に富ませられた先生であつたと見えて、何の造作もなく、

此魚はナヨシ又は名吉といふ、江戸では初生のものをヲボコといひ、二寸にもなれば洲走りといひ、君の前にある位のをイナといひ、海へ出て〻年を歷て更に大きくなつたのがボラといはれて居る。更に大きくなつたらトドといふ。

と說明せられた。そして其先生も、淡水池のみで育たうとは思はなんだ、と切に珍しがつて居られた。我輩は其時ふと、此魚は仲間が海に出て〻所謂ボラといふものになつたら、どんなにして暮し

て居るものであるか、それを知りたいといふ願が起つた。

魔神の手にせる大鉞を以て、殺ぎとつたやうに水面と正しく直角をなして、其脚部を渦卷き來る海潮の浸蝕にまかせつゝ、高く聳えた藤白山脈の極端の絶頂に、松の木立を背にして、白布を敏活に意味ありげに振つて居るものがある。何だか海濱から一里許も沖なる一組の漁船の一つに便乘して海から彼の山巔の信號を見て居るのである。漁師の親方の話によつて、それが他事ならぬ我等一組の漁船の總指揮官の本營であることが分つた。

專門に發達すれば、恐しいもの、彼本營の信號者の眼には里餘の其方の海の色合によつて、鰯の一群の行進する方向が明亮に分かるらしい。

見る〳〵中に、彼の信號によつて、我輩の乘れる漁船を一方の先頭として一組十餘隻が靜に單縱陣に開いて、全線約十町にあまる長き網を下しつゝ、漸次に大半圓を畫き、頓がて双方の先頭船は或大距離を持して平行に前進し始めた。之は全く鰯群の進軍し來るを逸早く認めて之を遠卷きに待受けにかゝつたのであるのである。先刻、一遊撃船が遙か前方で小石を海面にバラ〳〵投げて居つたのも、鰯の一群が中途で方向變換をやりかけたのを、山からの信號で覺つて、網の方向、即ち最初彼等のとりし方向を變ぜざらしむる爲に、巧みに豫防したらしい。愈、鰯軍勇ましく此方の網中に奮進して來るらしい。此方の双方の先頭船は、間々鰯軍が通過しつゝあるを認めながら、鰯軍とは行違ひの方向に徐航して居る。

折柄、山からの信號が一種の急調を示して、ピッタリ止つた、と同時に兩先頭船は急に方向を轉じて相合すべく斜前に、全速力を以て漕ぎ出した。之はいふまでもなく、鰯の群が全く包圍の圈内に入つたからである。

兩先頭船が愈、網で連絡すると、全くの一大圓陣で、鰯群は早や網に包圍せられて終つた。此包圍の完成すると同時に、周圍の十餘隻は一時に其軸を、陣の中心に向けて、各所定の部につき、其部の網を警戒しつゝ、漸次に圓周を縮めにかゝる。

鰯群の方では、其先頭が網に觸れたので、急に方向を轉じて復た網にふれ、茲に大恐慌が起る。大きな奴が波の間に、丸で蟲蠢の彈くやうにキラ〳〵して見ゆる。網の漸次に引寄せらるゝにつれて、ぷつつかりやうによつては、水面から三四尺も高く、甚しきは五尺にあまるばかりにも跳ね上がつて、誤つて船の内に落込む鰯もある。

昔、平清盛が嚴島に參詣の際、魚あり躍つて其舟に入るとある。それも此鰯のことである。それを吉兆だとて大層喜んだとある。今我輩の共に乘込んで居る漁師共は、迷信に就いては流石の清盛でもかなはないほどの執心家等であるが、唯此鰯の飛込みは、常住あることで、從つて別に珍しがりもしない。唯我輩は生來始めて自分の膝頭を大きな鰯にバチ〳〵やられた時には甚だ面白く感じた。

段々と包圍の船が中心に押寄せる。從つて此等に率ゐられたる包圍の一大圓網も追々に狹く小さく縮められて來る。從つて船も漸次に一艘二艘と優退して、乘組の一部は隣の包圍繼續中の船に助勢に移り、殘りの小坊主などは、優退船中で、成行きを見學して居る。何か食べて居るやうだつたから、我輩は包圍船から不圖注目すると、彼等漁師の小兒等は前刻跳ねて飛び込んだ例の大鰯を開いて細繩もて是を舷より吊して暫し潮に浸しておいて、今やそれを片端から平げつゝあるやうす亂暴な間にも又何處かのんきなところがある。

愈、包圍船が最後まで押寄せた時には、舷の高い漁船二艘丈が、網の引上げをするのである。舷の高いのに定めて居るのは、鰯の飛出して逃げることの夥しさを防ぐ爲である。

此引上げの際の、漁夫等の奮鬪と、網中の大鰯等の縱横跳ね飛ばす騷動とは、茲に書かぬ方が却て讀者に能く想像せらるゝことと思へるから、一切御任かせいたしておく。